小学校の事例 中央区 幌南小学校

# カモが飛来するビオトープ。観察から生まれた疑問を、環境意識へ。

ビオトープで生物多様性を学ぶ実感から
興味をふくらませて意識の向上へ。

## 内容 遊び場 憩いの場として親しまれるビオトープ

本校のビオトープは平成18年度に、札幌市の学校ビオトープづくり支援事業として設置された。4年を経た今では、魚やアメンボなどの生き物を観察できる子供たちの遊びの場、そして憩いの場となっている。

池では水生生物の循環や生物多様性について学ぶことができるため、教科の中で取り入れて学習している。たとえば理科では微生物を観察するとき、ビオトープの水を採取して生物を観察している。

また、このビオトープの池がカモに休憩所として気に入られたようで、毎年飛来してくるようになった。子供たちも好んで観察しているようである。

秋のビオトープ

## 今後 水辺に親しみ 観察し 興味を深める

平成21年はアゲハ蝶が、サンショウの木に卵を産み付け「サナギ」になっている姿を観察できた。しかし今年は見ることができず、自然はいつも同じではないということを実感させられる場になっていると感じる。

また、校地内にビオトープがあることで、水の存在を身近に感じられ、生物の観察が簡単にできるので、子供たちが興味をもったことにすぐに取組める。例えば、一年生がビオトープを見ていて「冬の間、金魚はどうしてるんだろう?」といった疑問をもつことがある。このように不思議に感じることを、自然と環境への興味につなげていけるようにしたいと考えている。

ビオトープでの活動のようす

**広げよう つなげよう 環境学習の輪**

**実施校から メッセージ**

子どもに危険がないように気配りをすることを心がけています。低学年の子どもの中には、「アメンボをもっと近くで見たい!」と身を乗り出してしまい池に落ちる子もいます。

施設自体の管理面では、メンテナンスを定期的にすることが長持ちのポイント。池に落ち葉がたまりすぎてポンプの循環が悪くならないよう、こまめに水の流れをチェックするとよい状態を保つことができます。



小学校の事例 北 区 新陽小学校

# 地域やPTAの協力による手作りビオトープで生き物に親しみ、自然を守る心を育てる。

水中をのぞけるビオトープを地域やPTAの協力で設置。
子供たちの興味を引くビオトープで、
生き物や自然の大切さを知る取組に。

## 内容 水中での生き物のようすを観察

本校のビオトープ作りは、平成17年度に学校ビオトープづくり支援小学校事業での支援金とPTAや地域の方の協力を得てはじまった。支援金で材料を購入し、大工さんなど専門的な知識をもっている地域の人たちが、PTAと一緒に整備を行ってくれた。

本校のビオトープは、校地にもともとあった池を活用して水の流れをつけ、ポンプでくみ上げ循環するかたちになっている。池の上に小屋が作られ、その中に入ると水の中を上からのぞくことができる。4年生は総合的な学習の時間に、新川で川や生物の観察を行っているが、その際に生物を少しもち帰り、ビオトープに放流。ビオトープの中で生き物が冬を越すことは難しいため、冬期間には校内の水槽へ移動している。

数年前には、水の流れが止まってしまったことなどもあり、平成22年度、開校40周年ということで改修することに。改修費は、PTAの特別会計を使用。資源回収などで得た収益金を、PTAで毎年貯めてくれているものである。価格のこともあり、普通のポンプではなく、バスポンプを使用した。

## 今後 ビオトープの維持には地域の力が不可欠

子供たちが、休み時間にビオトープの周りに集まり、遊んだり、観察し、自然や生物に興味をもつようになった。しかし、子どもがビオトープの脇を踏みつけることで土が中に入ってしまい、浅くなり汚れやすくなるという問題も。今後、子供たちが楽しく観察しても土が中に入らないように補修をしていくことが必要である。以前は各学年で授業でも使用していたが、現在は行っていないので、今後は理科等の授業の中にも取り入れていきたいと考えている。

水中が観察できる小屋入口

ビオトープを維持していくには地域の方たちの協力が不可欠なので、これからも地域の方やPTAにも協力いただき、ビオトープをとおして子供たちに生き物や自然を守ることの大切さを伝えることに取組んでいきたい。

**広げよう つなげよう 環境学習の輪**

**実施校から メッセージ**

ポンプが故障しやすいということもあり、ビオトープを維持していくには、補修やメンテナンスなどの費用も必要になります。生物もこれから増やしていきたいと考えているため、平成22年度の補修工事は資源回収などで得たPTAからの資金を活用しましたが、費用の確保の問題も考えなくてはなりません。また、継続していくためには、どの教員が担当になっても大丈夫なように、知識を共有していく必要があると思います。